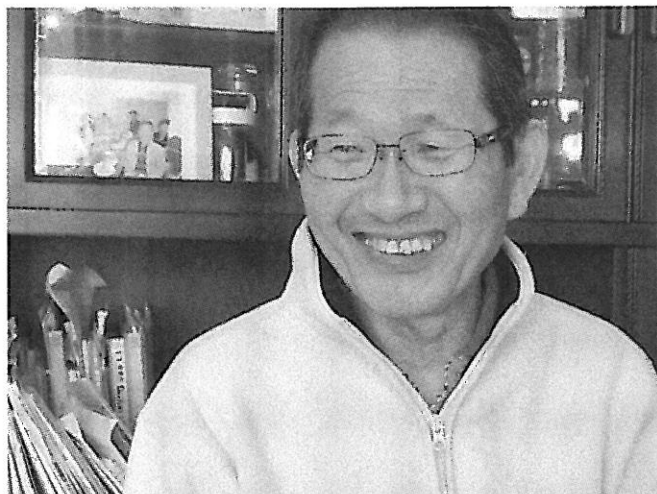




言葉の力 仲間の力

失語症友の会全国大会にとりくむ

渡辺 鋼 さん



私 が脳梗塞になり緊急入院したのは2009年10月でした。右手足にまひがあり、言葉も出ませんでした。今は5年目に入り、手はまだですが足のほうは少しなら歩けるようになり、失語症もだんだんよくなっています。

発病当時は、手足が不自由になってしまうことはあきらめましたが、言葉が使えなくなるのは我慢ができませんでした。コミュニケーションを絶たれるのは一番つらい。

話せないからメモでもと思ったら、メモを書くのはもっと大変だった。何もできない金縛り状態でした。

失語症は、脳の働きがうまくいかず、話せない・聞きづらい・書けない・読めない病気だと知って、正直、死にたいと思いました。

*

言葉が出ないと頭の働きそのものが低下するような感じがします。それは第2の大きなショックでした。

でも、失語症者は自分の言葉を守るためにも話したくなるのだと思います。その時、言語聴覚士（ST）の役割は大切です。「少しずつでも話す努

力を続ければ必ず成果が出てきます」と言ってくれる存在は神様以上でした。

無口な人でも言葉は頭の働き方に影響するものだとなれば、考えが変わってくると思います。失語症者は本能的にそのことを知っているけれども、どうしたらよいのかわからないのです。脳は言葉の力を借りて働くことを実感します。

*

失語症者で「友の会（若竹）」を作り、旅行や花見に行ったり、1年に一度劇をやっています。「失語症者が劇なんて」と思うでしょうが、全員が好きです。発病するまでは演劇など縁がなかった者たちですが、言葉が話せない現実を変えたいと思っています。

STが台本を書きます。2013年は作業所で働く69歳の仲間の女性を主人公にしました。春に活動に加わった男性はまだ早口で何を言っているのかわからないような状態でしたが、みんなで一緒にリズムをつけてセリフを練習すると、だんだん言葉になってきました。みんなでやった達成感は、大変なものなのです。

失語症になってつくづく思うことは、声に出して言うことの大切さです。頭の中だけで言うと1割くらいしか頭に入りません。声に出して言うことで意味がわかることが増えていきます。だから、人と人との対話が大事です。でも、ひとりぼっちにされている失語症者もたくさんいます。

*

誰もが可能性をもっています。5年前の入院時でも治療は必要だと思ったけれど、今が一番、リハビリで治るという実感があります。

失語症はゆっくり治る病気です。リハビリ専門医やSTの育成が大事です。介護保険が失語症をまったく認めていない現状もあらためてほしいです。また、駅や公民館、図書館などに「会話パートナー」を置くこともぜひ実現してほしい。

声が出せない失語症者が自分の声を上げることが大切です。でも、一人ではできないから、まわりの人と一緒に声を上げることです。失語症者と家族、STと会話パートナーなどの団結が肝心だと思っています。

わたなべ こう 人権回復を求める石川島播磨原告団団長。民間機・軍用機のジェットエンジンをつくる会社での思想差別、男女差別と40年たたかう。2004年東京地裁で会社に全面的に謝罪させ、2007年全面解決。二度と差別を繰り返させないことを約束させる。2009年脳梗塞で倒れ、リハビリに努力する中で地域の「友の会」に出会う。2014年6月の全国失語症友の会連合会第29回全国大会（東京多摩大会）の実行委員長。右は、渡辺さんが片手でつくった版画作品（2014年の渡辺さんのプライベート・カレンダーから）。

